

山田寺金堂復原模型の製作

飛鳥資料館

特別史跡山田寺跡の発掘調査は、飛鳥・藤原宮跡発掘調査部により昭和51年から開始され、前後4年に亘って中門・塔・金堂・回廊・講堂など、伽藍中心部の様相を明らかにした。なかでも画期的な成果となったのは金堂の調査である。その柱配置は古代建築の類型を破る独特なものであり、復原にあたっても特に意を用いる必要があった。

飛鳥資料館は昭和56年度秋期特別展示として「山田寺展」を開催し、その一環として山田寺金堂の復原模型を製作することとした。金堂復原のための主な要素は、1. 平面規模は法隆寺金堂にほぼ等しく、2. 平面は内・外陣（母屋・廂）からなるが、両者の柱数がまったく同数（10本）であり、3. 外陣の礎石には地覆座が付くが、内陣にはそれがなく、地覆石の中には間柱受けの仕口を持つものがある、ことである。これに加えて『諸寺縁起集』の山田寺金堂についての「一間四面二階」の記載から屋根は二重と推定される。上記のうち特に第2項が異例の平面を示唆するが、これに対して単一の決定的な復原案を提示することは難しい。必要な条件を満たすものとしては、以下の三種の復原案を考えることができる。

- a. 一重裳階付仏堂
- b. 二重仏堂（斗・肘木による組物、丸・平行垂木）
- c. 二重仏堂（雲斗・雲肘木による組物、丸・扇垂木）

a案については、裳階の柱間が母屋と同様に広く、裳階からの軒の出も大きく、また礎石もすべて同一の大きさのものを用いることになる点で、その実現は難しい。b・c案はいずれとも決め難いが、『上宮聖徳法王帝説』の裏書によって推定される金堂の建立年代（641年）を考えると、やはり飛鳥時代の建築様式にならっているとみるべきであろう。逆に山田金堂が法隆寺金堂と玉虫厨子との中間的様式になり得る点を考慮して、最終的にc案を実施案として採用し

た。模型の縮尺は1/10とし、製作の範囲は平面全体の四半分を基壇上から上重軸部分まで作り、断面を示すことにより構造の詳細がわかるよう意図した。屋根まわりについては、瓦葺を復原し、実物の1/10寸法の瓦を粘土を素材として焼成し着装した。埴仏については、その荘厳方法を確定し得ず、仏壇・天蓋などの内装や扉・連子・壁などの外装とともに復原を省略した。復原案の検討は昭和55年度から開始し、実施案の設計・製作に約9カ月を要した。

金堂復原模型

細部仕様は以下の通りである。基壇は上面周

隅の葛石のみを表現し、木製着色仕上げ、上面は土色とした。蓮弁造り出しの礎石、さらに地覆石も木製着色とし、基壇部分と初重の柱は桁行全体の半分を作成した。柱は円柱で胴張りを持たせ、入口以外の外陣(廊)の柱間中央に角柱の間柱を建て、柱頭を頭貫でつなぐ。皿斗付大斗・雲斗雲肘木により組物を構成し、大斗上の肘木は玉虫厨子と同様に通肘木である。丸桁は断面円形とし、法隆寺金堂と同様に、尾垂木先端の雲形肘木で支承する。柱間が大きいので、間柱上に中備の組物を置く必要があると考えられるが、ここではその一案として遊離尾垂木を通肘木間に組み込んで放射状に配し、丸桁を等分に支持し得るようにした。軒は一軒扇垂木である。垂木先瓦も縮尺通り作り、垂木木口に釘打ちした。瓦は垂木上に野地板を横張りとした上に葺き、隅棟を積み、片面は軒先まで葺きおろし、一方は数枚で止めて葺土を示した。なお、軒丸瓦・軒平瓦の瓦当面、鬼板の文様は実物にならって石膏で型取りし成形した。

本模型は全体的な復原模型とはなり得なかったが、木部の構造がわかりやすく、また瓦なども実物に近い質感を持つ、独自の特徴を有するものとなった。「山田寺展」の期間中特別展示室に展示し、現在は常設展示中である。

(松本修自)